

「教育臨床総合研究15 2016研究」

溝上泰子による生活論の展開 — 社会と個人の捉え方に着目して —

The Forming Process of Human Life Theory of MIZOUE Yasuko :
Focusing on her Idea of Relationship between Society and Individuals

上 森 さくら

Sakura UEMORI

(教育学部初等教育開発講座)

要 旨

溝上泰子（1903－1990）は、困難な生活状況であっても少しでも人間的に生活しようとする人々と共に、「生活すること」・「生きること」を学ぼうとし続け、人類生活者を名乗った人物である。本稿では、まず生活指導研究における溝上の生活論の可能性を提示した。そして、以後の研究の足掛かりとするため、溝上の社会と個人の捉え方に着目して生活論の展開を整理した。

〔キーワード〕 生活指導 溝上泰子 貧困

I. 本稿の目的

21世紀に入り、日本の貧困問題は広く社会問題として認知されるようになってきた。厚生労働省の発表によると、子どもの貧困率は1985年以来増加しており、2009年には15%を超えた。貧困に陥ると生活資源や物的状態の欠乏だけでは済まず、教育課程からの排除、企業福祉からの排除、家族福祉からの排除、公的福祉からの排除、自分自身からの排除の五重の社会的排除が行われる¹⁾。子どもの学校生活においてもこのような状況は確認されており²⁾、現代の重要な教育課題の一つである³⁾。そしてこの課題は戦前から生活綴方や自治（的）活動を通して子どもの貧困問題に取り組んできた生活指導の課題でもある⁴⁾。

現在、生活指導とは、「ひとりの人間的に生きてありたいという存在要求に応答して、その人が必要とし、要求している生活と生き方・在り方を共同してつくっていく営みである⁵⁾」と定義される。けれども生活指導研究の蓄積において、そもそも「生活とは何か」という定義はまだなされていない。この点について宮崎は、「人々が生活主体である」という共通了解は確認できるけれども、生活概念そのものの整理は依然として必要であると指摘している⁶⁾。他分野に目を転じると、生活概念は哲学や民俗学、社会学、家政学など様々な分野で論じられてきた。これらの知見を生活指導の観点から確認し、到達点や課題について整理しておくことは生活指導研究にとって重要である。

本稿で取り上げる溝上泰子（1903-1990）は、代表作とされる著作『日本の底辺—山陰農山村婦人の生活』（1958）によって、日本の学術界に底辺ブームを興した。戦後に島根大学初の女性教授として家政学について教鞭をとっていたが、生涯の問題意識である「女性の生活」、戦後まもない山陰地方農村における「底辺の生活」、高度経済成長期のシステムが行きわたった後の「子ども・老人の生活」等、生涯を通して貧困や社会的排除について研究を続けた人物である。島根大学定年退職後も、困難な生活状況であっても少しでも人間的に生活しようとする人々と共に、「生活すること」・「生きること」を学ぼうとし続け、溝上は自ら人類生活者を名乗った。溝上のこのような生活への焦点の当て方は、先述した生活指導の定義と多くが重なる。よって、溝上に着目することは生活指導研究において有意義なものになるであろうことが予測される。

溝上の活動や思想についての先行研究は必ずしも多くはなく、また当然ながらそれぞれの論者の専門とする視角に限定して論述されている。それらを整理すると次の3つの視角に分類できるであろう。第一に家政学⁷⁾、第二に女性学⁸⁾、第三に溝上の研究方法論と思想形成の検討⁹⁾の3点である。管見の限り、溝上に関する最新の先行研究を著している鬼嶋は、それまでの研究に対して、「それぞれが対象とする時期の溝上やその著作に検討が限定されているため、『底辺』に至る過程を溝上のひとつながりの思想形成の過程として理解する視点が欠落している¹⁰⁾」と評価する。そして日記等の未刊行資料も検討し、溝上の思想形成過程を詳らかにしようとしているが、現時点で1960年前後までの整理に留まっており、それ以後の思想の深化については今後の課題とされている¹¹⁾。

そこで本稿では、刊行資料の分析が中心となるものの、溝上の生活論の展開を、特に社会と個人の捉え方に着目し整理する。上述のように貧困問題は、単なる物的状態の欠乏ではなく、社会的排除の問題である。よって、ここに焦点を当てることが生活指導研究に資するものになると考える。

II 溝上による生活論の展開の整理—社会と個人の捉え方に着目して—

溝上の生涯における思想形成過程の区分を示した研究は複数あるが、それらの区分は必ずしも一致していない¹²⁾。まず、溝上の略歴を（表1）に示す。表の太枠は本稿での時期区分を示している。本稿における時期区分は【広島県在住（生誕～小学校訓導）期（1903～1922）—上森による、以下同】【奈良女子高等師範学校在籍（木下竹次による薫陶）期（1923～1933）】【東京文理科大学在籍（ドイツ哲学の探求と女性の役割考察）期（1934～1944）】【京都大学大学院在籍（久松真一師事）期（1945～1950）】【島根大学在籍前半（日本の底辺発見）期（1951～1961）】【島根大学在籍後半（底辺の分裂確認）期（1962～1966）】【神奈川在住（「生活と教育」思索）期（1967～1990）】とした。

溝上の思想が大きく展開する時のほとんどが、溝上の学び・研究する場所の移動と重なっている。唯一、島根大学在籍時を前半期と後半期に分類したのは、高度経済成長の影響で人々の生活が日本の隅々に至るまで変化したことを溝上が確認した時期によっている。

以下、各時期区分に従って溝上の生活論の展開を整理する。なお、溝上が生生活論を形成していくのは【奈良女子高等師範学校在籍期】以降である。そこで前節の時期区分に従って、【広

【広島在住期】については生活論形成の背景のみを記述し、【奈良女子高等師範学校在籍時】以降については、①生活論形成の背景、②生活論の特徴、③社会と個人の捉え方、の3点について整理して記述する。

【広島県在住（生誕～小学校訓導）期（1903～1922）】

溝上は1903（明治36）年に広島県御調町の零細農家の八女として生まれた。両親が姉妹に手に職をつけることを教育の方針としていたこともあって、溝上自身も教職を目指し、1922（大正11）年、広島県の三原女子師範学校を卒業し、尾道市立小学校で1年訓導として働くことになる。

溝上は「わたしの生は、部落の階層と性差の意識で生きはじめました¹³⁾」と述懐する。大人の子どもに対する横柄さや不平等には敏感であったが、特に男女差別に対しては「異常に鋭い感受性を持っていたようで¹⁴⁾」あったと述べている。教師となるため15歳で入学した広島県三原女子師範学校は「軍隊教育につぐ厳格な¹⁵⁾」学校生活ではあったが4年次には「不公平な舎監先生をつるし上げるリーダーの一人¹⁶⁾」でもあった。

このような学校生活を終え、溝上が自分自身のことを考え始めたのは、小学校訓導として子どもを指導するようになってからのことであった。校区の非常に貧しい漁村と、そこで産婆をしながら人々の生活の援助をする柴原ウラと出会い、女性問題と自分自身について考えるようになった。そして、この女性の勧めと援助もあって、溝上は奈良女子高等師範学校進学を決意する。

【奈良女子高等師範学校在籍（木下竹次による薫陶）期（1923～1933）】

① 生活論形成の背景

1923（大正12）年、20歳で奈良女子高等師範学校家事科に入学する。しかしながら、溝上の目指した自己実現は、女性が男性と同じように自立できない社会との闘いでもあった。奈良女子高等師範学校家事科入学直後には、家事のやり方を専ら学ぶ授業に失望し、一度は退学も決意し帰郷している。そのような状況で家事科を卒業し、その後家事科教員として励めたのは、当時奈良女子高等師範学校教授であった木下竹次との出会いによるところが大きい。「生活即学習、学習即生活」を掲げ、「家事科は人生科である」と述べた木下竹次から受けた影響は、溝上によって晩年まで繰り返し述べられた。

木下と出会ったことで、溝上は家事科担当教師として励みながら自らの個性を完成させることを目指した¹⁷⁾。なお、ここでの個性の完成とは、①健康と生活を楽しむ、②社会生活理想の完成のために個人の欲望を矯正することを指している¹⁸⁾。

こうして家事科教員として励みながら、溝上は自身が女性であることに対する折り合いをつけていこうとする。すなわち、様々な道具を使える時代において社会生活を送るにあたって男女差はないけれども、ほとんど例外なく女性が家事労働に従事していることを考えると、家事労働が「女性に適したことと見るのが穏当なのではあるまいか、かくした時に吾人の真に生きて行く道は、現実のままの生活の中に、より大なる価値を発見して行くのが本当の生き方であろう¹⁹⁾」と考えるようになる。そして、現代の文明に対して低レベルとみなされがちな家庭生

活の位置づけをいかに引き上げていくかが家事科教師としての使命であると考えようになった²⁰⁾。

(表1) 溝上の略歴および主な著書

| 年 | 略暦・主な著書 |
|------|--|
| 1903 | M36 広島県御調町の零細農家に生まれる |
| 1916 | T 5 八人の女の子と一人の息子という家族構成から、姉妹はほとんど職業女性として育てられる |
| 1918 | T 7 教師になる決意をする |
| 1922 | T11 高等小学校を卒業し、広島県三原女子師範学校に寄宿舎（全寮制）から通う |
| 1923 | T12 尾道市長江小学校で1年の教育生活で小学校4年生の女子児童を教える |
| 1927 | S 2 奈良女子高等師範学校家事科に入学 |
| 1931 | S 6 奈良女高師卒業、付属小兼実科高女助教諭となる |
| 1932 | S 7 『家事指導の実際』 |
| 1933 | S 8 『私の家事教育』 |
| 1934 | S 9 奈良高等師範学校をやめ、神田三崎町の研数学館にて、1年間浪人 |
| 1937 | S12 東京文理科大学教育学科入学（主にディルタイの生の哲学を研究する） |
| 1938 | S13 東京文理科大学卒業 |
| 1939 | S14 東京文理科大学教育学研究科研究生となる |
| 1941 | S16 東京府立第七高等女学校講師となる |
| 1944 | S19 無給の副手として研究室に残ることを希望するも、女性を理由として断られる |
| 1945 | S20 私立中野高等女学校講師となる |
| 1946 | S21 実践女子専門学校教授、東京家庭学園教授となる |
| 1948 | S23 外の職を退き、滋賀県出身の親鸞の研究者(実家は寺)と結婚して継子6人との生活を始める |
| 1949 | S24 『国家的母性の構造』 |
| 1950 | S25 一人疎開した夫を追って婚家の滋賀にて過ごす、離婚を決意 |
| 1951 | S26 大阪で柴原の選挙活動を手伝い、その時に知人となった者との交流から京大大学院進学を決意 |
| 1958 | S33 京都大学大学院入学 |
| 1959 | S34 京都女子専門学校教授兼寄宿舎の舎監となる |
| 1961 | S36 京都女子大学助教授となる |
| 1963 | S38 京都女子大学教授となる |
| 1966 | S41 『裸身』 |
| 1967 | S42 島根大学教授となる |
| 1968 | S43 『日本の底辺』 |
| 1973 | S48 琉球大学招請教授（3カ月） |
| 1976 | S51 『受難島の人びと』 |
| 1979 | S54 『生活者の思想—続日本の底辺』 |
| 1980 | S55 乳癌の発見と手術 |
| 1990 | H 2 『変貌する底辺』 |
| | S42 島根大学定年退職後、聖カタリナ短大教授となる |
| | 『底辺十六年—歴史の眼—』 |
| | 『くらしをひらくもの』 |
| | S43 聖カタリナ短大・和光大非常勤講師、および本州大教授となる |
| | 『生活人間学』 |
| | S48 上田女子短大教授となる |
| | 『わたしの歴史—絵と文』 |
| | S51 学校体制を離れ、一生活者となる |
| | S54 『わたしの教育原理』 |
| | S55 小学校で授業実践を始める |
| | H 2 逝去 |

② 生活論の特徴

木下の「生活即学習、学習即生活」の理念の元、溝上は担当する家事科の指導において、人間の生活を以下のように理解する。

家事生活は人間の生活の全部だ。刻々に変化して行き、刻々に進み行く人間生活の全部が家事生活なのだ。生きた生活に対する指導、範囲のこの上なき広さ、深さのこの上なき深さ、この中において活動しなくてはならないはずの家事の指導²¹⁾

「範囲のこの上なき広さ、深さのこの上なき深さ」という生活の捉え方にも木下からの影響がある。世界の動向（極大）を視野において自己のあり方を省察する（極小）生き方を示した「極小と極大の直結」である。晩年に至るまで溝上の解釈が深化し続けた概念の一つであるが、ここでは生活の広さ（生活を捉える範囲）と深さ（生活技術の追求）として捉えられている。このように生活の価値を見出すことによって、家事科の学習を単なる技術習得学習から解放しようとしていた。それらは家事科教育の研究・実践において、一方では身体・時間・金の合理的な使用を追求することによって経済・社会とのつながりを見出そうとすること²²⁾、他方では美的生活の追求によって社会的文化を創造する文化的行動の源泉となる文化的態度の形成を目指すこと²³⁾と転換された。

③ 社会と個人の捉え方

1932（昭和7）年に著した『私の家事教育』において、溝上は家庭や社会を組織として、個人は組織の仕事を分業するものとして捉えていた。各人は組織の仕事を分業し、持ち場に没頭して創造的活動を行うことで個性完成を目指すとした上で、そのような人間の根本原理は愛であるとしている²⁴⁾。このような捉え方は、例えるならば、理想の社会や家庭のあり方がジグソーパズルの枠で、個人はパズルのピースである。このような社会と個人の捉え方には、男女差別に疑問を持ちながらも、与えられた家庭や職場の仕事を通して人間としていかに個性を完成させるかということに問いを変化させたことがある。戦前の家事科教育がそもそも女性の特性を強調するものであったが²⁵⁾、それ以上に、溝上に後年まで影響を及ぼした木下竹次の教育論との応答と考えることが妥当であろう。木下は1929（昭和4）年前後から大東亜文化圏の建設に協力的な国民養成を前面に押し出し始めたことが確認されており²⁶⁾、溝上も当時の社会が目指す理想に即して与えられる役割の中で自らを深めることを自己の目標とし、また教育の目標としたと考えられる。

【東京文理科大学在籍（ドイツ哲学の探求と女性の役割考察）期（1934～1944）】

① 生活論形成の背景

1933（昭和8）年、溝上は奈良女子高等師範学校を退職する。男性教師と同等に働いていても異なる待遇の差であったことを始めとして、学校は民主的な場であることを謳っているにもかかわらず実態が伴っていなかったことに失望が大きかったためである。1年の浪人生活を経て、1934（昭和9）年、東京文理科大学教育学科に入学する。その後、東京文理科大学教育科

学研究科に進学し、卒業後に研究室の副手を申し出るが、女性であることで拒絶される。また、一見男性に見えるほどの短髪を、職（食）のために伸ばすことを余儀なくされる。男性との違いを意識せざるをえなかった学生生活もあって、「女とは何か、母とは何か」を追求していく。結果として、戦時中の体制を背景とした女性の価値づけが試みられるようになった（『国家的母性の構造』等）。

1944（昭和19）年、溝上は外の職を辞し、滋賀県出身の親鸞研究者と結婚して継子6人との生活を始める。この結婚生活で、溝上は自身の理論を結婚生活で実現させることに生きようと、まるで修行するかのよう日々を送っていた。しかしながら、1945（昭和20）年、夫が一人で滋賀の実家である寺へ疎開する。溝上は夫を追って寺に住み込むが、直に婚家を去ることを決意することになった。同年、弟が広島に落とされた原爆によって死亡している。

② 生活論の特徴

この時期の溝上の論考は特に東京文科大学での卒業論文で研究していたディルタイや研究生時に講義を受けた務台理作の影響が強く出ている。例えば、この時期の著作や論文では、人間の身体・心理・精神を観念的に男性的（＝合理的）／女性的（＝情緒的）と二分し、生活は「一つの生活ではなくして、多くの生活の統一態としての生活²⁷⁾」であると論ずることで、女性の価値が男性と同等であると示している。また、務台理作の講義による影響としては、「文化の二層構造」論があげられる。文化には「頂点」の上層文化と「底辺」の基層文化があり、「二つは一つで、同時に二つ²⁸⁾」であるため、基層文化なくして上層文化はありえない。戦時中には、国家の伝統を支える基層文化の柱が「産みかつ育てる」力を持つ絶対的な母性であると論じた²⁹⁾。

③ 社会と個人の捉え方

この時期の溝上による社会と個人の捉え方は、組織と分業された仕事に携わる個人という捉え方ではなく、社会倫理と生活原理を以てそれに向き合い「ひとりの性格」をつくりだす個性という捉え方であった。

社会と個人とは客体的に対立するものではなくて一体である。両者は対立的二者として客体的関係にあるのではなくて、己れの性格をもって結合する一者である³⁰⁾

世の人との交渉のただ中にありながら、しかも彼自身の内に深く住むことのでき得るひとり……（中略）……ひとりにおいて実際に人は生活の内容を形成しているのである。従って人をそのひとりの性格において捉えることはかえって人を世界の中ではたらくものとして捉えることである³¹⁾

ここではディルタイが社会倫理と個人の生活原理を対抗するものと捉え、個人を承服させられる社会の設立が必要と論じたこと³²⁾や、務台理作の「ひとは結局我の個性を形作るために、周辺の一切の束縛から自己自身を切断することに他ならない³³⁾」という言及等に影響を

受けたと考えられる。その上で、「ひとり」とは「母性の懐ろ」に抱かれ始原に立ち還り、母性の中に潜む絶対者対決することで再生していくものと論じ、母性の役割・価値について考察している³⁴⁾。

ただし、ディルタイが個人を承服させられる社会の設立の必要を論じていたのに対して、溝上は家庭の発展については論じているものの、「国の精神は直ちに家の精神であり、家の精神は直ちに家庭の精神である³⁵⁾」とし、戦時下の日本の「八紘を掩ひて宇と為む」精神に承服する前提で論じていた。

【京都大学大学院在籍（久松真一師事）期（1945～1950）】

① 生活論形成の背景

1946（昭和21）年、禅宗学者の久松真一の哲学に魅かれて京都大学大学院へ入学する。同年、日本国憲法が公布され、女性は国民主権と共に、男性と平等の権利を手に入れる。しかしながら現実がすぐに変化するわけではなく、溝上は母性の世界的地位を探求する姿勢を強めていった³⁶⁾。

1948（昭和23）年、京都女子専門学校教授兼寄宿舎の舎監となる。ここでの学生との生活により思想の視点が観念的なものから具体的なものへと変化していることが確認されている³⁷⁾。

② 生活論の特徴

母性の世界的地位の探求では、母親を自然のままにせず、「真の条理を究めた母³⁸⁾」とする必要があると溝上は述べている。ここでの「真の条理」とは、「極小と極大の直結」という概念に変化が加わったものである。ここでの極小とは自己の追求であり、極大とは日本社会ではなく世界各国とのつながりを意識することである。そうした真の条理を踏まえて、女性が基層文化を生み出し、文化の発展の基盤となることを論じた³⁹⁾。

③ 社会と個人の捉え方

日本敗戦後の溝上による社会と個人の捉え方は戦時中の反省より始まる。例えば以下のような記述である。

私たち人間は社会的な存在であると同時に、ひとりの性格を持つところの矛盾的存在であることも忘れてはなりません。過度の社会重視は個の崩壊を来し、事の真を失います。……自己に対決する前に、社会の袖の下に逃げてはいないでしょうか。自己の責任を社会に転嫁してはいないでしょうか。あなた方の生活の苦しさは良く知っています。それでも「あなた方は社会の名の下に、自己をあまやかしているのではないか。」と私は問いたいのです。主体喪失者の社会は社会ではなくって群集です⁴⁰⁾

ここには戦時中の「八紘を掩ひて宇と為む」精神に承服する前提への反省がもちろんある。それだけでなく、日本国憲法の公布・施行により女性の地位が向上したことを空文化させないためにも、人は社会に対する向かい方を反省していく必要があると溝上は考えていた⁴¹⁾。

以上のように自己に厳しく追ろうとする姿勢は時勢の変化によるものだけではなく、禪者として世界的に有名でもあった宗教学者の久松真一との出会いの影響もある。久松は禅によって覚者となった後、「仏はむしろ絶対自者的である⁴²⁾」と述べ、有と無の矛盾を含みこんで一切の絶対性を否定する主体を説いた。溝上は学問上のみならず、積極的に禅道場に通り久松の覚に近づこうとした。このような体験・生活のなかで自己を追求しなければならないとする久松の学究態度からの影響が、具体的には山陰農村地域の女性との交流を基盤とした研究に顕れてくる。

【島根大学在籍前半（日本の底辺発見）期（1951～1961）】

① 生活論形成の背景

1951（昭和27）年、溝上は島根大学に教授として赴任する。当初は躊躇いもあったが、東京文理科大学在籍時に師事していた篠原助市や久松真一の強い勧めによって、島根に赴任することを決意した。

溝上が地方農村女性と交流を本格的に始めたのは赴任2年後からである。この交流の中で溝上が見出したのは、未だ封建制を引きずる地域や家制度の中で、自己や周囲の人々の生活を少しでも向上させよう、深めようとする女性の闘いであった。そのような女性たちについて「生活と真正面から格闘している平凡な一家庭婦人……（中略）……それが平凡な市井の婦人であるだけに、高く貴いものであり、魅力を感じる⁴³⁾」と述べている。文化の発展の基盤となる底辺を支える女性をここに見出し、溝上は交流を深めていった。

② 生活論の特徴

まず農村女性と本格的に交流する前に、「極小と極大の直結」に関し、大きな転換点が訪れる。溝上は、極小に立つ自己が意識すべき極大を「同時代の世界の動向と人類の歴史」と深化させた。影響を与えたのは、1951年年頭のラジオ放送による東京大学総長の南原繁の挨拶と、明治時代の法学者であった梅謙次郎が作成した民法草案との出会いであった⁴⁴⁾。

南原はラジオ放送で、航空技術の発達により空間的に世界が一つになったため「人類的“世界共同体”の關係」を目指さなければならないと語った。溝上はここに世界が一つになる方向へ世界政治がなされねばならぬ歴史の必然性を感じたと述べている。

一方で、梅謙次郎が1888（明治21）年に作成した民法草案との出会いから受けた影響は、同時代だけでなく人類の歴史を含めて極大を意識する必要性を認識したことである。梅は1890（明治23）年に公布された民法の施行をめぐる民法典論争後に改めて伊藤博文が設けた法典調査会の民法起草委員を務めた人物である。溝上は1888（明治21）年に梅が作成した個人の人権を重視する民法草案と、1898（明治31）年に施行された家父長制家制度を確立した民法を比較する。そして、施行された民法を強固にしていく国民教育と第二次世界大戦の敗戦から「歴史の審判」を実感する⁴⁵⁾。このことから極大は同時代だけでなく人類の歴史を意識したものでなければならないと考えたのである。

さて、農村女性との交流を通じて、底辺の封建制を切り拓く鍵となるのは、生活における美の追求や表現活動だけでなく、生活の合理化⁴⁶⁾も必要であると溝上は考えた。例えば、嫁姑の

確執の一因となっている女性の経済的自立のなさを克服すること、家庭経済の記録・分析により家庭の経済的余裕を導くこと、一日のくらしの暇・ゆとりができるよう家事労働の効率化を図ること、等をあげている。

同時に、すべての人間のつながり方の根源として、人間としての愛情のありようを検討しながらも自覚をともなって献身する母性⁴⁷⁾の必要性について次のように言及した。

農家の母にかぎらず、母子の関係には切断がない。……非常をしらない愛情（生物的愛情とでもいおうか）が、一般に愛情として通用する。ましておくれた農家の母に、急に非情を知れとは無理なことである。だが、非情の裏付のない愛情は真実のものではない。非情を理性といってもよい。「親と子」は連続だけではない。切断がある。いずれ々人間同士として、考えられるべきものでもある。非情、意識の切断、理性については、単に母子の関係だけではない。わたし達の一切の生活について考えるべきである⁴⁸⁾

このような自覚した母性に根差した極小で自己を深めることで、極大である社会（世界の広さ）と歴史（世界の長さ）はつくられる⁴⁹⁾と溝上は論じた。

③ 社会と個人の捉え方

溝上は山陰農村地域の女性との交流の中で捉えた社会と個人の間を「場」と「座」で溝上は論じる。これは、禅哲学を踏まえた捉え方である。

山陰農村地域の女性と交流していく中で溝上が多く見たのは、個人の「座」を封建的な家や地域という集団の「場」が抑圧している状態、しかも狎れや諦めでその状態が継続されていることがしばしば存在する状態であった。例えば、地域の婦人学習会に参加するだけでも、夫や姑の目を気にしなければならない嫁の存在等である。

けれどもそのような封建制を引きずる地域や家制度という場にあって、自己や周囲の人々の生活を少しでも向上させよう、深めようとする女性の闘いも溝上は同時に見出す。それは、性的、経済的など様々な理由で苦しい生活を強いられていても、それに対して様々な文化的方法（対話、笑い、川柳、スポーツ等）を支えにして、より良いくらしになるよう工夫・闘いを重ねる女性との出会いであった。このような女性たちと交流する中で、溝上は、人は場に座を立て交流していくことで、変化を求めなければならないと論じた⁵⁰⁾。

溝上は文化的方法によって座を立て生活を変化させようとする女性を高く評価して交流してきたが、『日本の底辺』執筆時には、経済的に苦しい生活の中で文化的生活を追求するだけで良しとするのでは「片手落ち」であったと述懐している⁵¹⁾。情緒的側面と共に、例えば家計を記帳し分析するような合理的側面を持たなければ、苦しい生活から逃げているだけになりかねないと溝上は捉え直した。

以上のように情緒と合理を備えて座を立てた人間が対立を含め関わり合うところは、それを包む根本愛（≡心が合わさるところ）を必要とすると溝上は以下のように述べる。

いかほど夫と妻が対立しても、そのことによって、より高い、より深い生活がうまれると

ころに、その対立の意味があるのである。それには、その対立を包む場がなくてはなるまい。場。それを私は根本愛といたい⁵²⁾

このように、溝上は人の存在（人権・人間性）を脅かす関係性やシステムとしての場の存在を否定し、まずは人同士が向かい合うための座の必要性を述べる。そして、複数の人間による座が「より高い、より深い生活」を生み出すために、関わり合っていくための前提として場を根本愛のあるところとして変化させていくことを求めた。

【島根大学在籍後半（底辺の分裂確認）期（1962～1966）】

① 生活論形成の背景

1962（昭和37）年以降、溝上は高度経済成長による社会の変化やそれに伴う生活の変化を記すようになった。高度経済成長による社会の変化による肯定的側面として、女性の経済力向上による自由獲得、日常生活に浸透した合理的態度、生活向上のための組織活動が記されている。他方、否定的側面として、底辺で組織活動が可能な農家と、出稼ぎか離農しかできない農家に分裂している状況をあげる⁵³⁾。そして、「まことに困ったことがあった。それは合理化＝能率化＝考えること、という公式である。本来、わりきれない生活をわりきって行動する暮らし方が、生活の破壊をまねいている⁵⁴⁾」とこれまで生活の合理化を提唱してきた溝上が行き過ぎた合理的態度に警鐘を鳴らすようになっている。

② 生活論の特徴

先述の社会状況を踏まえて、溝上は自己を深め、世界の広さと人類の歴史を意識して他とつながることで「本来の生きる座」をつくることが重要⁵⁵⁾であるとした。そのためには、合理化できない生や生活の矛盾と向き合うこと、その生きる姿勢を教えなければならないと次のように述べた。

パンをえて生きることばかりの教育でなくて、それをくらって死ぬことを教育することが考えられねばならない。科学、技術のための教育だけではなくて、生きる姿勢を教える教育がとわれてきている。生きることは同時に死ぬことである。この根本矛盾につながる生活の矛盾を考えつづけること、この矛盾と格闘する姿勢こそが人生を己れのものにする。そして、生死の根本矛盾を、たんに宗教家や哲学者だけでなく、あたりまえの人びとが考え、暮らしのなかで、生きてゆかねばならぬことを確信している。ここからしか、芸術、学問のような高度の文化もあたりまえの生活もうまれない。人生の完成としての老いもまたかくしてとげられる⁵⁶⁾

このように矛盾と対峙し自己を深めるという考え方には久松の「東洋的無」の影響があるだろう。溝上はさらに、自己を深める教育の基礎は、まず家庭であるとし、母性が担ってきた役割を再評価することを求めた⁵⁷⁾。

③ 社会と個人の捉え方

高度経済成長による生活の変化を農村共同体の崩壊として溝上は確認している。例えば、家庭の主な稼ぎ手が出稼ぎにより離れることで老人と子どもだけの歪な家族構成となること、若者の離農による農村共同体の高齢化などである。経済的にゆとりが出たとしても、それはささやかなもので、「すべての国民は、健康で文化的最低限度の生活を営む権利を有する」という日本国憲法第25条が空文化していることに言及する⁵⁸⁾。

このような状況に対して、国家・社会の政治的対策が絶対に必要だとしながらも、溝上は文化の底辺の「荷ない直し」のあり方として、農村女性の新たな共同体づくりに着目する。

溝上に着目したのは1958（昭和33）年に誕生した大仁養蚕婦人会である。鳥根県下の養蚕技術は全国に名高いレベルにあったが、世界経済の動きや化学繊維技術の向上によって収入としては不安定なものであった。養蚕産業は女性の仕事として発展してきた産業であったため、農家の収入が低下していった時代の苦しい生活の中で、合理的に経済収入を確保しようと婦人会が組織されたのである。溝上はこの会の誕生と活動を取り上げ、この新しい共同体（組織）づくりには経済活動を協同して行う合理性があることを高く評価している。それだけでなく共に携わる人々の間に生まれる情緒性が存在すると溝上は指摘している⁵⁹⁾。大仁養蚕婦人会には合理性と情緒性が同時に存在することに各構成員が気づき、それを受け止めて一つにし、日常の生活にまた活かしていくことを以下のように求めた。

わたしは人間は合理性とこの感慨（情緒性）のからみあいのなかでそだてられてゆくのだと思う。この二つを一つの体でうけとめてゆくこと、これが生きることであろう。そして、そのすがたがあらゆる瞬間に、生々として、日常生活の全部にあらわれる。『おかいこ』をよみ通して、あの専門的表現力が生活の全部をみつめる眼であり、そこから実践する力であることをのぞむのである。それは、そこ以外にひとりひとりの生きる座はないし、その座はすでに社会をふくむものであり、社会と個人を生かす基盤であるからである。この意味で、「わたしたちみんな文化人である」と自覚できる⁶⁰⁾

このように、家庭の外で立ち上げられた場づくりが日常生活に波及する可能性を見出し期待を寄せている。

【神奈川県在住（「生活と教育」思索）期（1967～1990）】

① 生活論形成の背景

1967（昭和37）年に、溝上は島根大学を定年退職し、神奈川県川崎市へと移る。1年後には、それまでの研究の集大成である『生活人間学』を出版する。その後、1976年まで東京の大学にて講義し、大学を離れた後も1980年より小学校で授業する。その内容は共通して、「生きる」・「生活する」ことについて共に哲学することを目指すものであった。

② 生活論の特徴

溝上が家庭生活について図示したものを（図1）として示す。ここでの重要な概念として

③ 社会と個人の捉え方

この時期に体系的に示された「生きる座」の座の獲得は、自分が立つ人類の歴史と同時代の世界の動向という極大を意識する歴史的社会的自我（極小）から始まる。極大を意識した自己（極小）の地点に立ち、合理的側面と情緒的側面から日常生活を見つめ直して複数の場づくりを往還することによって、「座」の深まりを生み出せると溝上は考えている。

そして、溝上はもはや複数の座を包む根本愛として場を捉えず、場とは構成員が生活者としての座から対峙することで生物的にも精神的にも新生し、深い自覚を生み出す場所とする。そして、場づくりを往還し座を深めることが、すなわち「生きる」ことだと提示する⁶⁵⁾。

このような生き方を溝上は教育の場を通じて追求しようとしてきた。例えば溝上は大学の講義において学生の要望を取り入れながら講義内容を含め学びの場を整える。そして講義後に400字詰め原稿用紙1枚の感想文を提出させる。この講義内容と感想文が『わたしの教育原理』に収録されている⁶⁶⁾。そこに収録された感想文は、溝上と学生が共につくった場での学びがどのように日常生活を見つめ直す契機になったかを記したものが選ばれている。

IV 本稿のまとめと今後の課題

本稿では、溝上の生活論の展開の中でも、特に社会と個人の捉え方に着目して整理することを目的とした。その結果、生活論の展開に従って、個人と社会の捉え方も以下のように変遷してきたことが明らかとなった。

【奈良女子高等師範学校在籍（木下竹次による薫陶）期（1923~1933）】では、社会が求める形に合わせて個性を育て自己実現を図ろうとした。【東京文理科大学在籍（ドイツ哲学の探求と女性の役割考察）期（1934~1944）】では、主にディルタイの影響を受けて、既存の社会倫理に合わせて「ひとり」の位置から生活原理を見なおすことを提唱した。このような既存の社会の枠組みを問わない論述は戦後に一転する。

【京都大学大学院在籍（久松真一師事）期（1945~1950）】には、戦時中の日本国内社会重視の反省と久松真一からの影響もあって、社会の状況を隠れ蓑にせず自己のあり方に厳しく迫る必要性について論じた。このような捉え方は、島根大学に赴任後、山陰農村女性と交流するようになってから具体性を持った論述となっている。【島根大学在籍前半（日本の底辺発見）期（1951~1961）】では、封建的で抑圧的な場に狎れるのではなく、合理・情緒的側面から座を立てる必要性について論じた。そして、本来、場とはこのような個人の生き方を認めあえる人類愛に満ちたものでなければならぬと言及した。

【島根大学在籍後半（底辺の分裂確認）期（1962~1966）】からは、場を単なる座を置く場所と考えず、主体がつくるものであると明確にする。その上で、場づくりを行う生活によって、いかに己の座を深めるかということを探求した。そして、家庭以外での場づくりで得られた合理・情緒的な経験を家庭での日常生活で活かそうとすることが座を深めることになるという可能性について論じた。【神奈川在住（「生活と教育」思索）期（1967~1990）】では、衣食住を整える場づくりと、必要に応じて所属する職場・学校・趣味サークル・自治会・産業団体等の場づくりでのそれぞれの経験を往還させながら個人・社会共に深化していき、最終的には、このような営みを通して、人々が共同でつくる場を底辺として文化が形成されると溝上は捉えて

いた。そして、大学の講義や小学校の授業において、場づくりの往還によって座を深める教育実践を目指した。

このように溝上の生活論における社会と個人の捉え方は、〈社会の求める人材として個人のあり方を考察〉→〈抑圧的な社会に狎れるのではなく、人権を基盤とした個人の自己実現を追求することとそれを認めあえる社会のあり方への言及〉→〈社会をつくりかえる主体としての生き方の中での自己実現の追求〉と変化している。

以上を踏まえると、晩年から溝上が追求した座の深まりとは、すなわち、既存の場をつくりかえる主体としての力を獲得することともいえるのではないだろうか。この点についての詳細な検討と、溝上の大学や小学校での教育方法の詳細な検討についてを今後の課題としたい。

【註】

- 1) 湯浅誠『反貧困－「すべり台社会」からの脱出』岩波新書，2008年。
- 2) 村瀬ゆい・湯浅恭正『学校における子どもの生活現実と教育方法学』『子どもの生活現実にとりくむ教育方法』図書文化，2010年，67-80頁。
- 3) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（第7期）の2015（平成27）年8月26日教育課程企画特別部会（第14回）における初等中等教育が果たすべき役割についての論点整理の報告においても子どもの目の前にある生活上の困難として触れられている。
- 4) 龍澤利行「貧困問題と生活指導の思想」日本生活指導学会編『生活指導事典』エイデル研究所，2010年，62-63頁。
- 5) 竹内常一「はじめに」日本生活指導学会編『生活指導事典』上掲，3頁。
- 6) 宮崎隆志「生活変容の現代性と自己形成論の課題」『生活指導研究』第31号，2014年，1-11頁。
- 7) この視角からの研究は、管見の限り以下の2点である。福田公子・山田綾「教科理論の根底となる家政教育哲学序説－溝上泰子氏の人類生活者教育－」『広島大学教育学部紀要第2部』第32号，1984年，227-236頁。原田省吾・佐藤園「奈良女高師附小における溝上泰子の家事科教育の構想と実践－家庭科教育における『子ども』と『科学』の統合に関する研究－」兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科『教育実践学論集』第6号，2005年，105-116頁。
- 8) この視角からの研究は、①溝上の戦時下の思想の研究（例えば、中島邦「国家的母性－戦時下の女性観」『講座女性学Ⅰ女のイメージ』勁草書房，1984年，235-263頁），②戦後の「底辺」に焦点を当てた研究（例えば、天野正子『「生活者」とはだれか』中公新書，1996年），の2つに分類できる。
- 9) 小松隆二「溝上泰子－底辺学と大学地域論の先駆者」『地域と教育』第14巻，白梅学園，2007年，54-67頁，や，鬼嶋淳「溝上泰子論－『国家的母性の構造』から『日本の底辺』へ」赤澤史朗他編『戦後知識人と民衆観』2014年，19-56頁，などがある。
- 10) 鬼嶋淳，上掲。
- 11) 鬼嶋は、『国家的母性の構造』（1945）から『日本の底辺』（1958）にいたるまでの思想・研究の模索の過程を検証している。
- 12) 例えば、福田・山田は1933～1948年までを「哲学探究期」としてまとめている（福田・山田，上掲）が、鬼嶋はこの期間を東京でドイツ観念哲学を探究した時期と京都で久松に師事した時期の2つに分けている（鬼嶋，上掲）。
- 13) 溝上泰子『わたしの歴史－絵と文』未来社，1973年（『溝上泰子著作集』第11巻，影書房，1987年，23頁）。
- 14) 同上（29頁）。
- 15) 同上。
- 16) 同上。
- 17) 溝上泰子「家庭創造と家事科教育の改新」『学習研究』1929年（『溝上泰子著作集』第13巻，影書房，1988年，7-8頁）。
- 18) 溝上泰子『私の家事教育』東洋図書，1932年（『溝上泰子著作集』第2巻，影書房，1988年，28-29頁）。
- 19) 同上。
- 20) 同上（268頁）。
- 21) 溝上泰子『家事指導の実際』東洋図書，1931年（『溝上泰子著作集』第1巻，影書房，1988年，267頁）。
- 22) 同上（31頁，127-135頁）。
- 23) 溝上泰子『私の家事教育』上掲（40頁）。
- 24) 溝上泰子『私の家事教育』上掲（219頁）。
- 25) 菊地るみ子「家庭科教育における教科論への模索－木下竹次の家庭科教育論から戦後の家庭科教育論へ－」『奈良女子大学教育年報』8号，1990年，17-36頁。
- 26) 竹田清彦「奈良女高師附属小学校における体育－真田幸憲主事時代－」『奈良女子大学文学部研究年報』18号，1974年，91～112頁。
- 27) 溝上泰子『国家的母性の構造』1943年脱稿（1945年，敗戦前に同文館より発行，未完成）（『溝上泰子著作集』第3巻，1988年，24頁）。
- 28) 溝上泰子『わたしの人生交響楽』影書房，1992年，12頁。

- 29) なお、ここでの母性とは女性のみが有するのではなく、母胎経験によって男性も観念的に有するものであると溝上は論じている（溝上泰子『国家的母性の構造』上掲、(247-274頁)）。
- 30) 溝上泰子『国家的母性の構造』上掲（92頁）。
- 31) 同上（98-99頁）。
- 32) 尾形良助『ディルタイ研究』1970年、理想社、174-185頁。
- 33) 溝上泰子『国家的母性の構造』上掲、(98頁)。
- 34) 溝上泰子『国家的母性の構造』上掲、259-262頁。
- 35) 同上、213頁。
- 36) 溝上泰子「母性教育」『社会教育 8』1950年脱稿（『溝上泰子著作集』第13巻、上掲、54-89頁）。
- 37) 鬼嶋、上掲。
- 38) 同上（56頁）。
- 39) 同上（54-89頁）。
- 40) 溝上泰子『裸身』日本国際出版社、1950年（『溝上泰子著作集』第4巻、上掲、107-108頁）。
- 41) 溝上泰子『生活者の思想—続日本の底辺』未来社、1961年（『溝上泰子著作集』第7巻、影書房、1986年、13-23頁）。
- 42) 久松真一『東洋的無』弘文堂、1940年。
- 43) 溝上泰子「新潟夫人」1953年（『溝上泰子著作集』第4巻、影書房、1988年、230頁）。
- 44) 溝上泰子『生活者の思想—続日本の底辺』上掲、13-23頁。
- 45) 同上、13-23頁。
- 46) 溝上泰子『日本の底辺』1958年（『溝上泰子著作集』第5巻、影書房、1986年）。
- 47) 溝上泰子「母の座」『琉球新報』1959年5月21日（『溝上泰子著作集』第14巻、影書房、1989年、80-82頁）。
- 48) 溝上泰子『日本の底辺』上掲（25頁）。
- 49) 溝上泰子「婦人問題と仏教」『近代仏教 6』法蔵館、1961年（『溝上泰子著作集』第13巻、上掲、115-126頁）。
- 50) 溝上泰子「極小が極大に直結する」1961年（『溝上泰子著作集』第8巻、上掲、240-245頁）。
- 51) 溝上泰子『日本の底辺』上掲（91-92頁）。
- 52) 溝上泰子「犬の喰う夫婦喧嘩」1953年（『溝上泰子著作集』第4巻、上掲、203-208頁）。
- 53) 溝上泰子『変貌する底辺』未来社、1966年（『溝上泰子著作集』第8巻、影書房、1986年）。
- 54) 溝上泰子『底辺十六年—歴史の眼—』松江・今井書店、1967年（『溝上泰子著作集』第9巻、影書房、1987年、141頁）。
- 55) 溝上泰子「生きる姿勢」『くらしをひらくもの』松江・今井書店、1967年（『溝上泰子著作集』第9巻、上掲、266-275頁）。
- 56) 溝上泰子『変貌する底辺』上掲（225-226頁）。
- 57) 同上（116頁）。
- 58) 溝上泰子『変貌する底辺』上掲（15-124頁）。
- 59) 同上（153-182頁）。
- 60) 同上（163頁）。
- 61) 溝上泰子『生活人間学』国土者、1968年（『溝上泰子著作集』第10巻、影書房、1987年、12頁）。
- 62) 同上（24頁）。
- 63) 溝上泰子「生活者としての自覚」『生活教育』1987年7月（『溝上泰子著作集』第15巻、影書房、1989年、66-67頁）。
- 64) 溝上泰子『生活人間学』上掲（175頁）掲載図を一部改変。
- 65) 溝上泰子『わたしの教育原理』未来社、1972年（『溝上泰子著作集』第12巻、影書房、1987年、95-106頁）。
- 66) 溝上泰子、同上、7-221頁。